

今回は、みのかも定住自立圏主催の歴史イベント参加報告です！

◇ みのかも定住自立圏とは 美濃加茂市 & 加茂郡市町村の圏域

2009年3月、美濃加茂市が「みのかも定住自立圏」の中心都市宣言を行い、加茂郡市町村（坂祝町・川辺町・富加町・七宗町・白川町・八百津町・東白川村）との間に、順次協定を締結することにより、定住自立圏がかたちづけられました。

定住自立圏では、それぞれの地域が持つ強みを活かし、補完しあいながら圏域全体を活性化させ、「住み続けたい」「住んでみたい」と感じるエリアをめざす事業を行っています。

関高校には、定住自立圏内の市町村から大勢の生徒が通学しています。定住自立圏は、私たちの地元でもあります。関高校の探究活動では、この地域の課題に関し、積極的に取り組んでいきたいと考えています。



美濃加茂市ウェブサイトより転載

http://www.city.minokamo.gifu.jp/shimin/contents.cfm?base_id=11025&mi_id=5&gl_id=16&g2_id=74#guide

◇ おうち de 歴史イベント 夕雲の城（美濃加茂市・富加町・坂祝町 主催）

1565（永禄8）年、中濃地区を舞台に、織田氏と斎藤氏の間で大きな戦が行われました。織田軍は、各務原の鶉沼城、坂祝の猿啄（さるばみ）城、美濃加茂・富加の堂洞（どうぼら）城を次々と攻め落とし、最後に、関の安桜山城（関城）を占拠します。

富加町では、マンガ「夕雲の城」を発刊するなど、史実をわかりやすくするための努力を積み重ねてきました。YouTube ライブを活用した今回の企画もその一環であり、さらには、定住自立圏内の歴史遺産を生かしたまちづくりを考えるイベントとして行われました。

◇ 当日の様子

今回、関高校地域研究部は、「信長軍侵攻ルートを訪ねる 夕雲の城ツアー構想」というタイトルで、川下りやバス周遊で歴史遺産をめぐるツアーを提案しました。

続いて、東洋大学の木下聡准教授（関高卒業生）の基調講演「後斎藤氏と織田氏的美濃国攻防史」、美濃加茂市・坂祝町・富加町の市長・町長とマンガ作者の渡辺浩行氏によるトークセッション「地域の歴史資源を生かしたまちづくり」が行われ、最後に、旭堂南海師匠による「歴史講談 夕雲の城」が上演されました。



◇ 富加町との連携の経緯

このイベントへの参加は、前後3回に渡るフィールドワークや古文書勉強会を通じて、富加町教育委員会の文化財専門官、島田崇正さんと、およそ2年間かけて計画したものです。

令和元年7月7日、マンガ「夕雲の城」を現地に携えての一風変わったフィールドワークを行ったのが第一弾でした。フィールドでの鮮烈な印象をまとめた石原伶緒さん、山内康誠さん両名のレポートは、その年の夏に行われた「戦国武将作文コンテスト」(朝日大学主催)でそれぞれ最優秀賞、優秀賞を受賞しました。



当時の地域研究部は、堂洞合戦の研究に加えて、美濃各地に残る明智光秀伝説について調べていたので、そうした学びの成果を研究者とともに発表してみないかと、島田さんからありがたい提案を受けました。令和2年3月開催予定の「夕雲の城フェス」がそれであり、関高生もポスターセッションや研究発表を行い、パネルディスカッションにも登壇するはずでしたが、新型コロナウイルス感染症により中止となりました。

新年度、新入部員5名を加えた我々はフィールドワーク(計2回)や、富加町の刀鍛冶・吉田研さんの指導で製鉄・刀鍛冶実験(計5回)に参加し、今回のオンラインイベントで、歴史遺産を生かしたまちづくりに関する提案を行うことができました。富加町の歴史遺産には、初期の前方後円墳や正倉院戸籍にもあらわれる半布里の集落跡、平安期の仏像など、まだまだ多くの魅力があります。今後もさらに学びを深めていきたいと考えています。

◇ 生徒代表の感想



美濃加茂市・富加町・坂祝町主催のオンライン歴史イベント「夕雲の城」に参加した。

第一部では、関高校地域研究部が、信長の東美濃攻略の舞台となった歴史スポットをめぐる観光ツアーを発表した。各市町の首長さんや学芸員の方々の前で緊張したが、ツアーの魅力をしっかり伝えることができたと思う。

第二部の木下先生の講演では、古文書などの史料から歴史を復元する手法を学ぶことができた。木下先生は関高の卒業生。歴史学の最前線で活躍するすごい方が先輩にいらっしゃることを知り、驚くとともに誇りに感じた。

第三部の首長の皆さんを交えてのトークセッションでは、司会の方から指名を受け、飛び入りで話す機会を得た。自分自身、美濃加茂市の一市民であり、マンガ「夕雲の城」を読んだ経験を交えつつ、自分たちのツアー提案や、研究を進める中で自分の率直な思いを述べることができた。

美濃加茂市の伊藤市長さんからの「一緒にやりましょう」という言葉はうれしかった。市長さんの言葉を聞き、感謝の気持ちを抱くとともに誇らしい思いがした。今後、私たちは、市長さんや町長さんの期待に応えて、実際のツアーに関する細かな提案を考える予定である。専門家の意見を聞きながら、チームでおたがい忌憚のない意見を述べ合い、実現可能なツアーにするつもりだ。

